

「キレる子ども」の背景

西 伸 之

子どもは変わったか

「子どもが変わった。理解できない」とよくいわれます。しかし、そういう話をきくたびに私は「そうだろうか」と首をかしげたくありません。

今の子どもたちは、私が子どもの頃と本質的に変わってはいないのでは?と思うからです。

ほめられれば嬉しいし、認められれば元気が出ます。叱られてばかり、それもへたな叱り方をされればくさったり、腹を立て怒ります。勉強がよくわからなければやる気を失います。

特に中学生にもなれば「何のために勉強しているのか」

という本質的な疑問を持つようになります。

先日も私のクラスの班ノートに「理科で電流の勉強をした。こんなことが将来どんな役に立つのだろう?勉強がつまらない。学ぶことの意味を知りたい。楽しい学校生活を送りたい」とある子が書いてきました。思春期特有のとても正常な感覚です。

しかし、今日の学習指導要領は、そういう子どもたちの疑問や問いかけに応えるものになっていません。また今日の受験学力獲得競争の激化がそれに拍車をかけています。

変わったのは子どもたちをとりまく社会や教育・学校ではないでしょうか。子どもの「育ちそびれ」とよ



くいますが、大人の「育ちそびれ」「育て方の責任」が問われています。本来、好奇心にあふれ、一人一人個性的に成長してきた子どもたちを寛容の精神で受け止めることができなくなっているほど大人社会や学校がやせ衰えているように思えてなりません。

「キレる子どもたち」のひとつの背景

アーベルの会（不登校の親と教師の会）でお母さんたち、先生たちと今の学校についてよく話し合います。

「保育園にいたころ、子どもは『やったー！』『できた！』と生き生きしていたのに小学校に入るとどんどん自分に自信をなくしていく感じがする」「（このころは出来る子、出来ない子の差が小学校一年生の二期後半にはもうはつきりできてきている。内容が多くて消化不良をおこしちゃっている子が次々にでてくる）」「せめて低学年では、学ぶ内容を少なくして、どの子も自信をもてるようにしてほしい」そんな声がたくさん出されます。

かなりの子どもたちが「わからない辛さ」を毎日味わわさせられています。それは自己否定感を積み重ねる毎日でもあります。このことが自分の存在への誇り、

人間としての尊厳、自己肯定感を育たなくしています。こんな状況が低学年から続けば高学年になって、その鬱積した気持ちが吹き出してくるのは当然です。

中学生になると高校受験の重圧がそれを増幅させます。一見「突然キレた」ように見えますが、むしろ、たえる毎日の中でたまりましたいたものが限界をこえて吹き出したとみるべきでしょう。

よくいう「普通の子」も学ぶ楽しさ、わかる喜びを心から味わうことが出来ず、自分や他人を大切に思う心を育てられないまま鬱積したものを心の底に抱えているのだと思います。

学校はどうなっているのか

文部省の「三割がわかればよい」という学習指導要領、「わからないのも個性」という「新しい学力観」の問題とともに、今、学校のシステムや学校（先生）のもつ価値観も再検討が必要です。

「いつも明るく頑張れ」「いわれたことを早くきちんとやれ」「大きな声ではきはきと発言せよ」「いやなことも我慢して最後までやりぬけ」と先生方は叱咤激励します。

そうでない子は怒られ指導されます。学校に合わない子として……。

「自分が何をしたいのか、何にゆきづまっているのか」を問われることなく、「学校に合わせろ」という指導をうけ、叱られまいと一生懸命にそれに合わせて従っている子も疲れます。

子どもにとって「楽しくない学校」はこうした状況にあります。近頃、そうした傾向が強まっているように思えてなりません。

また、怒鳴ること、あるいは脅かすことで生徒をきちんと整列させたり、静かに話をきくようにさせた教師が「生徒管理がうまい」と持ち上げられ、学校内で発言力を強めていく傾向があります。

気の弱い先生、心やさしい先生は、強い先生の「生徒管理もちゃんとできないのか」という無言のプレッシャーの中で、つい子どもにグチグチ言ってしまう、子どもたちの心からさらに遠い所に自分を置いてしまいがちになります。

例外も多く、いちがいにはいえませんが、いま置かれている子どもたちの状況について様々な研修で学び頭でっかちなながらも学級担任らに比べて子どもたちを

大きな視点でとらえられる管理職や、わが子の反抗期を経験し、子育ての悩みも親としてぐぐってきて、「これぐらいいいじゃないか」「学校なんかは人生の一通過点、社会に出てから子どもたちは様々な活躍している。できなかった子が社長になったなどというのはよくある話だ」といつてのけられる年配の教師の方が人間観が深く、子どもたちへの対応が柔らかなようです。

「この子がいると学校が、学級がだめになる」「自分の学校経営・学級経営の評価に響く」、そんな気持ちで指導する教師には絶対に子どもたちは心を開きません。学校・学級は良い方向には変わりません。

一方、心から子どもを思い、「なにかしてやりたい」という使命観で懸命に接している教師には「善意のおしつけすぎ」を感じることが多いです。

しかし、「こうあるべき」という価値観の狭さに限界はあるでしょうが、その教師の情熱はいつかは子どもに通じます。そういう先生を大事にしたいのです。

何の手も打たず、一見ものわかりがよさそうに放任しながら、いざ事が起きると平然とその子を見放すタイプの教師が、本当は一番冷たい管理主義なのかもしれません。教師の人間観、子ども観が問われるところ



です。

子どもの輝きをとりもどすには

私自身、教師という職業についてみて、「私も教師である前に、一人の人間だから、足りないところも、わからないところも、抜けているところもいっぱいある」ということをなかなか子どもたちの前や親たちの中に入って言えないものだということを感じてきました。「教師」という看板にとらわれすぎると、親にも子どもにも建前ばかり言うことになります。親や子どもたちと相談して、力を合わせて一緒に問題に取り組むという方向が見えません。

自分の不十分さを率直に出し、お互いに共感的につきあえないところでは、深い信頼関係は育ちににくいものです。

どちらかといえば、教師には小中高と比較的優秀な成績で卒業し、頑張り抜いてきた経歴の持ち主が多く、自分の価値観を信じ、それで子どもや親をはかりがちです。しかし、子どもたちはやがて学校を巣立ち広く多様な場でそれぞれの生活をきずいていきます。それを考えれば、学校は「みんな同じ」を求める場から

「みんな違う」ことを教え、それを大事にすることを教える場になることが求められているのではないでしょう。もちろん生きる力をつける、基礎的な学力をどの子にも保障することは当然です。

自分らしさを自由に発揮し、互いにそれを認めあえる社会や学校が変わったとき、子どもたちは本来のかがやきをとりもどしていくことを私は子どもとの日々で感じるのです。

(にし のぶゆき・新潟市内野中学校)

